

青春を捧げた軍隊生活の思い出(五)

福島県 大竹 清 照

昭和二十(一九四五)年八月に入ると中隊には、「泰国に進出せよ」との命令が下達された。

メコン河を下って泰国のムックダーハンに、八月八日の昼過ぎ到着したと言う。この時、大隊は各中隊より屈強な兵隊一個小隊を選出して混成小隊を作った。第十中隊からは自分が分隊長で外十人程が出て、小隊長には第十二中隊の将校のようだったが、その名前を忘れた。そして中隊主力は船舶輸送で対岸の泰国に渡った。

我々混成小隊は、行軍でメコン河岸の軍行路を南下して行った。毎日毎日暑い日差しですがの頑強な兵隊達も顎を出す者も出て来て、自分ほこれらの装具や銃等を持って行軍を続けた。どこへ行くのかさえ知らされてはいなかった。

時あたかも雨期であるのでメコン河の支流は氾

濫して低地はほとんど泥沼となり、首まで水に浸かって行軍をした。ぬれた衣服は一時間もすぎると熱い太陽の光で乾いてしまう。かと思うと、また沼地となった軍行路を、前方の高い所に見当を付けての行軍であるため、一日に何キロも進軍することができない。

ある時は橋が流され、約百メートルの向岸の道路に行くことさえできない。それで付近の部落で丸木舟を借りて装具と銃器は舟で運び、泳げる者は裸になって渡ることにした。馬も裸にして泳いで引張る。自分は水泳は子供の時から只見川でなれていたので平気で濁流を泳いで馬を引いて行った。しかし、この馬は現地の小さい馬で、川の中程まで行ったらずぶずぶと沈んでしまった。何とも可哀想だが仕方がない。

何頭かが同じ運命にあったようだが、泳げない兵隊は装具や武器を舟で渡した後、三、四人ずつ丸木舟で渡って、兵隊全員はこのようにして無事川越えができた。こんな日には一日に二、三キロ

位しか行進することができない。

このような苦しい行軍をしていた八月十六日頃から盛んに敵の飛行機が上空を飛来し、空からマイクで「日本の兵隊さんに告ぐ、日本は米英連合国に対し無条件降伏をした。すみやかに武器を捨てて出て来なさい」と、はつきりと日本語で流している。百戦錬磨の兵たちは、これは敵の宣伝に相違ない、我々は銃を持っている限りは最後の一兵まで戦うんだと意気込んで密林の軍行路を行軍していた。

毎日同じように低地の水溜りの道路を進んでいたら、遙か前方は少し小高い道路のようだ。こんどは水に浸らなくても大丈夫な軍行路が続いている。しばらく行くと、敵ではない友軍の乗用車らしいのが見え、だんだん近づいて行ったら連隊本部の車であった。

ここで小隊は休止、命令受領者集合と言われて行くと、「我軍は八月十五日に終戦の証書が交付

され、終戦となったのだ」との命令伝達であった。分隊に帰って分隊員に伝達したところ、皆ただ茫然として気が抜けたようになり、昼食になっても誰も飯の支度をする者もなく涙を流して泣くのみであった。これは昭和二十年八月二十七日のことであった。

連隊本部は、この伝達をしようとしても、後に追い付けず、先廻りをして待っていたのだという。こんなことも知らずに十二日間の間、毎日水に浸って苦勞の行軍をして来たのかと思うと、まったくやりきれなかった。今日までの幾多の戦闘において一度も敗戦らしい戦闘はした事が無かっただけに、なおさらのことである。

そして命令は「第八十五連隊本部はウボン（昔の山田長政の墓がある）と言うところにいる。第三大隊もウボンに終結せよ」となり、我が第十大隊もウボンに向かって進発となった。

私たち混成小隊は船で泰国に渡り、それぞれ元

の中隊に復帰して行動を共にし、炎天下のもうもうと上がる砂煙りの道路を急遽ウボンに向かった。

ウボンの街近くになると道路に沿って机が並べられてあり、我々はイギリス軍に武装解除をさせられるのであった。総指揮官はスマイル中佐とか言った。大隊の将兵は携帯する武器弾薬のすべてを机の上に置いて行くように言われた。

「背負袋、水筒、雑囊はそのまま、銃帯、剣、弾薬はすべて左側の机の上に乗せて行け！」と。兵隊達はこの時点で、日本が全面降伏し、終戦になったことを実感した。

夜明け方、第三大隊は、このまま、ナコンナヨークと言うところへ行くよう指示され行進した。我々が中隊を離れ別行動をしていた時、大隊長橋爪少佐は内地勤務となり帰還したので、元師団副官の野口少佐が後任の第三大隊長となり、「爾後、第三大隊は野口建築大隊と呼称す」と言う指令が第十中隊に届いた。そして広い草原に捕虜收容所

の兵舎を作れということになった。

ナコンナヨークは四方を高い山と密林に囲まれた摺鉢の底のような盆地である。英軍がここに捕虜を收容した意図は逃亡を防ぐためと思われるが、まさに捕虜收容所としてはこれ以上のところはあまるまいと思える程の所だった。赤土の丘陵地帯には既に幾つかの仮兵舎が造られてあった。その中の一棟に入居し、中隊は直ちに生活のための設営に着手した。

裏山には竹林がずっと続いている。暖地の竹は節と節の間が一メートル余もあり、長さ十メートル以上もある竹を担いで来て兵舎の材料とした。屋根は草葺き、床下は六十センチ位の高さにして、床や周囲はアンペラで囲み通気性を良くした。半月程で收容所が出来上がった。師団司令部も一角に設置され、兵隊達は捕虜と言う形で收容されていたが、軍隊当時の規律そのまま整然とした態度で生活していた。

この辺には悪性のマラリア蚊やサンリなどの毒虫がいた。時折床下のアンペラの下に尾をくると上方にまげている。これに刺されると数分に死亡すると言う。また普通の高熱を發するだけのマラリア蚊でなく、黒スイマラリア蚊がいて、これに刺されると忽ち毒素が脳に昇り、苦しんだ十分後には、ころりと死んでしまうという恐ろしいものである。

ある日のこと異変が起きた。私の分隊の兵隊が、普通のマラリアで寝ていたと思うと、突然大声を出して手足をばたつかせた。どうしたのかと皆で彼の手足を押さえたのだが四人掛りでも押さえきれない。狂乱して苦しみ、十分位経ったら彼はぐったりとして、もうこの世の人では無くなってしまった。彼は体も大きい方で、支那大陸の作戦から今日まで、同じ分隊員として同じ飯を食べた仲間だけに、余りにも無惨な死に方となったことは何と言つてよいのか言葉も出ない。

早速、軍医殿が来て解剖して原因を見たいと言

うことで、野外に囲いをして、自分達四、五人が立会いで、頭を解剖して脳を摘出して見ると、真中に真つ黒く毒素が溜っているのだった。この蚊がまた誰かを刺すと、このようになると言われ、皆、さすがの猛者共もこの姿を見て脅威をかんじたのだった。

収容所の給与はすべてイギリス軍の支給によるもので、食糧は人間が生きて行く最低限度の物だった。飯は飯盒の中盒に一杯という少なさで、辛うじて飢えをしのぐ状態であった。当然のことだが栄養失調で身体の不調を訴える者が多くなった。中隊ではこの窮状を打破するため山に行つて野草とか食糧になる物を採取して食糧の不足を補おうと、各班交代で山の物を採って歩いた。

当時この地区の収容人員は四万人とも言われ、第二十二師団、第四師団、第五十六師団、第三十七師団と泰緬国境よりここに集められていた。これらの部隊が皆同じ食糧不足のため山の物を物色

するのだから、山の密林も丸坊主になってしまった。こんな生活が何年続くのか不安と焦燥の日々であった。

涼を求めて夜空の星を眺め、今頃故郷では、秋の収穫の時期であろうか、家内の人々はどうしているだろうか、都会育ちの者達は大打撃でやられ帰る家などあるだろうか、と各人想い思いに夜空の星に向かって話をしていった。

そんなある日、我々中隊に泰緬国境部隊から来たのだという、元准尉で出身は郡山で魚屋さんを営んでいた菊池准尉と言う方が、転属の形で我が中隊に入ってきた。野原で車座になってその方の話を聞いた。

彼は元南方軍作戦参謀であった辻政信大佐の下で作戦書記をしていたと言う。安南は今までフランスの支配下にあったが、今度安南は安南人により独立をすると言う。「インドシナ独立運動が胎動している。しかもこの運動には辻政信大佐が支

援して、安南独立義勇軍を組織し、ラオス、カンボジア方面に精通した日本兵募集をしている。ここから約二キロの地点にトラックが待っていて、義勇軍に入れば皆二階級特進で、しかもお金と服と拳銃を渡すことになっている。このようなみじめな捕虜生活よりずっとましだからどうだ」と勧誘するのであった。

こんな話を二、三度聞いたと思ったらぶつくりと姿を消してしまった。中隊では我々に彼を探すように指示されたので付近一帯を一週間程探し歩いたが、ついに見つからないままとなった。後で聞いたら隣隊の第十二中隊からは十数人が彼の話に乗って応募して行つたと聞いたが、我が中隊からは一人の逃亡者も出なかった。

内地に帰還して三年程経つてから、私は青年団長として祖国再建の若人の先頭に立って、元郡山出身の佐藤一郎君を尋ねた時、ナコンナヨークでの菊池元准尉さんが今魚屋をしていると言うので会いに行き、「その後どうして帰られたか」と聞い

たら、独立運動は失敗し、漁船に乗って帰って来たと聞かされた。

軍隊という集団の中にはいろいろの人間が集まっているもので、師団長は收容されたと言えども士気を鼓舞するために、各中隊より二人ほど選抜して相撲教育を始めた。それで私と小林国男君の二人が中隊より選抜され、朝五時に起床し、まだ皆が寝ている内に朝の稽古、膝を曲げた状態での兔飛びで脚力を強くする。この稽古を一カ月も続けた。

始めて四、五日目からは便所に行っても膝を曲げる事もできないほどだったが、十日経ち二十日間も練習したら異状なく、脚力が丈夫になった。毎日朝三時間稽古をして朝飯を食べてから、今度は中隊長以下全員が裸になって、相撲を行うようにという師団長命令だから誰一人として文句を言う者もなかった。

朝稽古の教官は元大相撲で十両をしていたとい

う砲兵隊の方で、我々がぶつかっていつてもまるで子供と大人程の差であった。我々は中隊では基本から教わっているのだから誰も自分に勝てる者はない。それに給与は特別給与で飯盒一杯の銀飯であった。栄養失調どころか我々相撲教育者は十キロも体重が増え、皆から相撲は「いいなあ」と羨望されたものだった。

器用な人もいて落下傘の布で芝居の衣服を作り、演芸小屋も作り、週に一回は芝居興行の見物で慰安をして兵隊の心をなごませていた。

昭和二十一年の元旦をこの收容所で迎えた中隊は、師団長、部隊長など直属部隊長から元旦の祝詞を受け、全員心一つにして無事帰還するようにと切々なる訓示を受けた。三月になって第三大隊長野口清水少佐に「野口大隊は急遽夜行軍でバンコクに行き、内地へ帰還する兵たちを收容する兵舎造りをせよ」と言うことで、各中隊から約三分の二の兵隊が建築隊としてナコンナークを出

発しバンコクへ向かった。自分は中隊主力に残って、その後の事は判らない。毎日別に仕事とてなく帰る日を待っていた。

ある日、兵舎の外に行くと山の方から象の行列が見えて来た。現地人は象の頭の上に乗し、木材運搬作業であった。長さ五メートル位、直径七、八センチもの大木を象は長い鼻の先で巻いて歩いて来るところであった。成程材木の山出しに象の使役とは誠に驚嘆の至りであった。また兵舎内ではザラ紙で作った将棋をやったり、また竹で作った「マージャン」をやったりの日暮らしであった。

六月二十日、我々も帰還のためナコンナヨークを出発、バンコクへ向かった。先発していた野口大隊とは別に渡船場近くでイギリス軍の私物検査を受けたが、着る物として夏物の衣服のみ、背負袋の中身とて無いので検査も簡易に終わり、各人に乗船カードが渡された。検査を終了した順に船に

乗り込んで行く。船はバンコク岸壁を離れ懐かしい故国を目指して出航したのである。昭和二十一年六月二十八日の夕暮れだったと思う。

復員船は米軍提供のリバティで、仏印沖を通り南シナ海、バシー海峡を航行、今は敵機の襲撃も、敵潜水艦の脅威もない。船倉の中は暑くておられず皆甲板に出て大海原の彼方を眺めていた。東シナ海では船の後方に波しぶきを立てて、マグロの大群が真っ黒に船を追っているのが見えた。誰かが「オーイ！ 陸が見えるぞ」と言う。台湾だろう。台湾の東側を通り、やがて我々の復員船は浦賀の港に入港した。

直ちに上陸かと思ったら、検疫のため二日程船の中に置かれ、検疫も終わった六月十五日、焼土と化した祖国へ上陸することとなった。そして久里浜の仮兵舎に行き、営舎前でさらに念入りな身体消毒を受けた。DDTと言う真っ白な粉末を頭のとっぺんから足の爪先まで振り掛けられて粉鼠のようになってしまう。これは虱の消毒だと言

われた。

その夜兵隊の一人当たり米三合、乾パン一袋が渡され、その外目的地までの列車の乗車片道券と金三百円也を一律に交付された。翌日、昭和二十一年六月二十七日、起床と同時に朝食を終え、九時近く解散命令が伝達された。「各人、本日中に宿舎を明けて、それぞれ故郷に向かって出発せよ！」と。中隊の兵隊たちは十時頃各々支度をして宿舎を出て、久里浜駅に向かった。「お世話になりました」「またきつと会おうぜ」「元気でな！」「頑張れよ！」と名残を惜しみながら再会を約束し、固い握手を重ね別れた。

我々会津の兵隊共は車窓に焼土と化した東京周辺の光景を見た。都会の姿は見るに無惨な光景であったが、やがて我々を昔と変わらず迎えてくれたのは会津磐梯山の勇姿であった。

やがて会津若松駅に到着、ここからそれぞれ各方面に分かれたのだが、家に帰るのだから理髪屋

さんで頭を刈って行こうと床屋さんに寄ったら「戦地から帰った兵隊さんはお断りです」と、どこの店でもやってくれない。我々は命を的に戦い抜いて郷里に帰って見ればあまりにもみじめな屈辱とも言うべき対応に皆激怒したものだ。それは戦地帰りの者は虱がいるからと言うことであったことが後で判った。

自分達が出征する時は皆歓呼の声で送ってくれたのに今は誰一人として迎えに出てくれる者はなく、ただ自分の兄弟たちのみであった。過去の栄光は空しく、惨たる兵士の帰郷であった。

あれから五十有余年、青春を軍隊と言う組織の中に、一片の葉書で入隊し、苦しい戦争と言う悲惨な生活を想い出す時、今日の平和の尊さが二十一世紀を迎えた今後も続いて貰いたいと念じています。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十七年十二月、若松東部

二十四部隊に入隊、釜山から奉天・山海関を経て浦口・南京さらに揚子江を遡上して中支の金華に到着、歩兵第八十五連隊第三大隊第十中隊へ編入された。

歩兵第八十五連隊は歩兵第八十四連隊と共に第二十二師団の基幹部隊で、師団は第十三軍の指揮下に杭州に駐屯して同地の警備に当たり、昭和十五年十月の江南作戦、同十六年三月の太湖西方作戦などに参加している。太平洋戦争が始まり、杭州の警備を第七十師団と交代して金華に進駐して同地の警備・治安維持に当たることとなり、この頃に体験記執筆者が追及、入隊している。

師団は昭和十九年に第二十三軍に編入されて香港に進出、湘桂作戦に参加し、同二十年には仏印に転じて明号作戦に参加したり、ビルマ戦線投入のためのタイに進出した時点で終戦となっている。

執筆者は、歩兵第八十五連隊が金華に駐屯している頃部隊に追及、一年間初年兵教育を受け、その後、前記の師団の行動の中で湘桂作戦に参加す

るため南支の広東から長駆、桂林に進出、直ちに反転して南寧、更に仏印国境鎮南関を通りドンダ・ランソンを経てキノンに至り、明号作戦に参加。後ビルマの夏季攻勢作戦命令で、カンボジア・ラオスを経由してジャングル地帯を進軍中、昭和二十年八月終戦の命令を受領した。その後、メコン河を渡り、タイ国ナコンナヨークで抑留され、昭和二十一年七月に久里浜から復員となる。

これらの体験を執筆者は過去四回にわたり寄稿され、今回は第五回として、メコン河を下って、八月八日の昼過ぎ泰国のムックダーハンに到着し、以降、終戦の状況を復員までを記録している。

執筆者が「青春を捧げた」と言うように、執筆者は、まさに青春真っ只中の四年間を御国に捧げてきた。

終戦後、帰国して、福島県の会津若松駅に到着、命を的に戦い抜いた服装のまま郷里に帰って、後には、その姿から遠慮されたことだと、怒りの心

は氷解したものの、家に帰るのだから理髪屋さんで頭を刈って行こうと寄った床屋さんで散髪を断わられたことに、あまりにもみじめな屈辱とも言うべき対応に激怒したものだ、と述べている。

そして「自分達が出征する時は皆歓呼の声で送ってくれたのに、今は誰一人として迎えに出てくれない者はなく、ただ自分の兄弟たちのみであった。過去の栄光は空しく、惨たる兵士の帰郷であった」と。

「あれから五十有余年、青春を軍隊と言う組織の中に、一片の葉書で入隊し、苦しい戦争と言う悲惨な生活を想い出す時、今日の平和の尊さが二十一世紀を迎えた今後も続いて貰いたいと念じています」と、この長い「青春を捧げた軍隊生活の思い出」の記録を結んでいる。

思い出の記

私のタイ国従軍記

岐阜県 秋葉定雄

一 軍属に応募する

戦後五十数年経って、私が若い時代に軍属としてタイ国に従軍した頃の、忘れていたことを断片的に思い出しながら、綴ってみたいと思います。

私が第二次世界大戦に関わったのは、昭和十八年（一九四三）年夏のことです。私は当時十八歳、国鉄の高山機関区に勤めて三年目のことで、昭和十八年三月から機関助手として高山線の岐阜、富山間の列車に乗務していました。

夏のある日、機関区の掲示板に次のような掲示が出ていました。

軍属募集

一、人員若干名

一、南方方面